

令和7年度新潟県地域活性化に関する研究助成

成果報告書

令和8年3月

特定非営利活動法人 新潟湿地都市研究所

目次

1. にいがた湿地都市クイズラリーの開催	2
1.1. 実施概要	2
1.2. 実施結果	6
2. 新潟砂丘フットパスの構築	7
2.1. 先進地視察（山形県長井市フットパス）	7
2.2. ウォーキングイベントの実施	9
2.3. フットパス構想の策定	14
3. 県立鳥屋野潟公園をフィールドとした環境学習	19
3.1. こども生きもの観察会	19
3.2. 探鳥会	19
3.3. 公園のお散歩会	20
4. 湿地都市シンポジウム	22
参考資料	25
○2024-25 シーズン：フライウェイ連携成果（PDF）前後編	25
○クイズラリーチラシ	25
○10/5 シンポジウムチラシ	25
○10/12 新潟砂丘フットパスチラシ	25

1. にいがた湿地都市クイズラリーの開催

1.1. 実施概要

新潟市内にある自然・環境系および歴史・文化系施設に設置された問題を解いて施設を巡るクイズラリーを開催した。

クイズラリーは大学生の男女2人が湿地の謎に関する答えを導き出すストーリー形式となっており、2人組が立ち寄る市内の各施設を巡りながら楽しくクイズを解いてもらうものとした。

本クイズラリーを通して多くの参加者から新潟市の自然環境や文化、歴史を通じて湿地都市新潟を体験してもらう機会とした。なお、新潟県、新潟市の後援を得た。

(1) 実施日程：

令和7年10月1日(水)～

令和8年2月28日(土)

(2) 実施場所：市内を4エリアに分けて実施
一つのエリアでは4施設を回って答えが完成する仕組みとした。

a. 北区エリア

- ①水の駅「ビュー福島潟」※
- ②水の公園福島潟 潟来亭
- ③雁晴れ舎
- ④北区郷土博物館 ※

b. 江南区・秋葉区エリア

- ①江南区郷土資料館
- ②弥生の丘展示館
- ③新潟県立植物園 ※
- ④石油の里ビジターセンター

c. 西区・西蒲区エリア

- ①潟東歴史民俗資料館 ※
- ②新潟市文化財センター
- ③上堰潟休憩所
- ④佐潟・水鳥湿地センター

d. 中央区エリア

- ①新潟市水族館マリニピア日本海 ※
- ②県立鳥屋野潟公園スポーツ公園・ビジターハウス
- ③県立鳥屋野潟公園鐘木地区・鳥観庵

- 次回以降、キャラクターのバリエーション化を図ることも想定した。



ニッキー（左）とロウ（右）

(7) プレゼント

- 16 箇所設問全ての正解者を全問正解賞とした。また各エリア 3 問正解以上（12 問正解）、2 問正解以上（8 問正解）を入賞とし、その他は参加賞とした。
- プレゼントは 1 エリアの回答を 1 口として最大 4 口分を用意し抽選で発送することとした。
- プレゼント数は、予算に応じてあらかじめ設定した。
 - 全問正解賞（10 口）
 - 12 問正解賞（20 口）
 - 8 問正解賞（30 口）
 - 参加賞

(8) 事前準備

- 各施設に協力を依頼し問題を設置
- クイズラリーチラシの作成・配布
- 当事業の広報周知

(9) クイズラリーPR チラシ（兼：台紙）

- A 4 両面カラーで作成した。
- クイズ応募の際のメモ用として記入欄を設けた。
- チラシには、物語の動機づけ紹介とスタート用の公式 line 用 QR コードを掲載した。（チラシは別紙に添付する）

(10) ストーリー：

ラムサール湿地都市にいがたクイズラリー-2025
「潟と印の冒険譜」

第一章：潟に潜む謎の影

ラムサール湿地都市・新潟の福島潟を訪れた大学生ニッキーとロウは、ゼミのレポート作成のためにフィールドワークを行う。しかし、観察中に不気味な黒い影を目撃し、地元の老婆から「潟の主」の存在や鳥たちの異変について話を聞く。ロウは古文書を探し、潟の調和が乱れる時に現れる「古の印」について知り、その場所が「亀田郷」であることを突き止める。黒い影、怯えるオオヒシクイ、そして潟の主の怒りが繋がり、彼らは更なる謎解きを求めて江南区へと向かう決意を固める。

第二章：古代からの警告

ニッキーとロウは「亀の地」を手がかりに、江南区郷土資料館で古地図や干拓の歴史を学ぶ。古代の湿地で米を作っていた弥生人の知恵が、現代の潟の異変に関係していると考え、弥生の丘展示館で不気味な模様が描かれた土器を発見する。それは病んだ「オニビシ」を示唆しており、異変は地下水脈に関係している可能性が浮上する。植物園での調査により、地下水脈の汚染が植物に影響を及ぼしていることが判明。ニッキーとロウは新津丘陵の石油に関する知識を得て、次の目的地を「失われた潟」の西蒲区に定める。二人は自然との共存の知恵を守るため、謎を解明し悪に立ち向かう決意を固める。

第三章：砂丘に眠る希望の光

11 月下旬、ニッキーとロウは西蒲区の「潟東歴史民俗資料館」で、鎧潟の干拓に関する歴史を調査していた。干拓の急激な進行に、ニッキーは何か隠された理由があるのではないかと、という直感を抱く。そんな中、謎の男が現れ、二人に「陰の水脈に触れるな」と警告を与える。男の言葉から、干拓には表面には見えない深い秘密があることを察知した二人は、安全な場所へと逃げ込み、新潟市文化財センターで過去の文化財を参照する。二人は、地形や潟のエネルギーの重要性を再認識し、特に地下水脈に隠された影響に気づく。ロウは、翡翠の石を見つけ、この土地の古代の力を象徴するものとして手に入れる。上堰潟公

園を訪れた二人は、綺麗な景観の背後に潜む問題を考え続け、『ジオ・アルケミー機構（天条律）』という怪しい組織の存在に気づく。

第四章：未来へつなぐ輝き

最終的に、二人は佐潟での異変を察知し、コハクチョウたちの行動を見ることで、黒幕の狙いを感じ取り、「鳥屋野潟」が次の舞台になると決定する。鳥たちの知恵から恩恵を受けて、彼らは新潟の未来を守るために再び行動を起こすのだった。

コハクチョウたちが自然の力を象徴する舞を通じて、悪しき影を浄化しようとする二人、ニッキーとロウの奮闘が描かれる。彼らは儀式を行い、自然界のエネルギーを集め、ジオ・アルケミー機構（天条律）の呪いに立ち向かうことを決意する。鳥屋野潟での儀式を経て、ニッキーらは翡翠の力を見出し、調和の重要性に気づく。最終的に、二人は新潟市を守る番人となることを誓い、さらなる冒険の始まりを感じる。自然と人間の共存の重要性が強調され、未来への希望が描かれた。

1.2. 実施結果

事業目標は、クイズラリーへの参加者 500 人を計画したが、有料入館施設の入場時に配布した湿地カードの配布数より参加者数は 114 名でした。また、クイズの回答応募は 87 名あり、回答正解数より抽選で A 賞 10 名、B 賞 20 名、C 賞 50 名にプレゼントを配布しました。

事業の実施により生まれた効果、成果

クイズラリーをきっかけとして若者や親子連れが普段訪れない施設へ入館する契機となり、展示物や地域文化への関心を高める効果がみられました。

また、家族で市内を巡る機会が増えたとの声も多く、入り込み数が減少する冬期に、地域回遊性の向上や学習・体験機会の創出につながったと考えています。

事業の参加者等の声

参加者からは、下記のとおりイベント自体の楽しさや新鮮さを評価する声が多く寄せられました。

（参加者の声）

- ・家族と出かける機会が多くなり、とても楽しかったです。
- ・散歩しながら見たことのない野鳥に出会うこともできました。ボリュームを減らしてもいいのでこまめにいろんな分野で開催して欲しい
- ・大変有意義な時間でした。参加して良かったです。
- ・子どもといっしょに新潟市内各地を巡ることができて楽しかったです。クイズの難易度も程よく、展示をしっかりとみるきっかけになりました。第二弾を期待しています！！
- ・初めて知る施設や情報もあり、知識が広がった。歩く所も多く、健康のためにもよかったです。有料の施設の割引があるとありがたいと思った。

一方で、クイズをスタートする際の QR コードの読み取り等に不慣れなケースや通信状況が不安定な公共施設があるなど想定外の事象も発生しました。

こうした改善要望を踏まえれば、次回はより参加しやすく満足度の高い事業になることを期待しています。

2. 新潟砂丘フットパスの構築

2.1. 先進地視察（山形県長井市フットパス）

(1) 視察日程：

令和7年6月21日（土）～22日（日）

(2) 視察場所：山形県長井市

- 参加者：6名
- 現地案内：田中健三さん、大羽雅子さん（ながい黒獅子の里案内人）

(3) 行程

1日目（6月21日）：小出地区の歴史的建造物と整備された水路

①白つつじ公園

午後1時に白つつじ公園で案内のお二人と合流し、小出地区の史跡等に関して案内いただきました。白つつじ公園は、もとは「松が池公園」と呼ばれていましたが、市内の豪農が育てていた白つつじを譲り受ける際、「白以外のつつじは一切植えない」という約束のもと造成され、白いつつじが公園一帯に植栽されているそうです。白つつじが公園の魅力を実際立させている逸話です。

②水生植物バイカモの生育

市の西外れの補給用水路から、必要に応じてゲート操作で各水路へ水を供給し、市内の水量を常に一定に保っています。水路内では安定した水温・水量が、貴重な水性植物であるバイカモの良好な生育環境を作り出しています。バイカモは、水温25度以上で死滅してしまうそうですが、絶えず水量が確保されていることで良好な生育が保たれているようです。

③街中の水路

街中を流れる水路は鎌倉時代まで遡りますが、水利用の歴史を基盤として近世の豪商たちが主導して整備した当時としては画期的なインフラ整備となっていました。現代では、昭和42年に起きた水害を教訓として建設された長井ダムなどの大規模な災害対策事業により、街中の水害に対する安全性を抜本的に向上させることとなりました。



様々な水路を見学した中でも興味深かったのは、用途の異なる複数の水路を立体的に交差させる「立体交差水路」の存在でした。高度な土木技術で、土地利用の制約を克服し、異なる水系の水を干渉させずに配分する水路で、年間を通じて見学依頼が入るほど注目されているそうです。

木蓮川は室町時代から昭和28年まで、山から切り出した木材を流す「流し木」に使われた産業用水路で、市の重要な経済基盤（命の川）であったそうです。

また、洪水に対するリアルタイムな監視システムとして、市内20箇所に「水路センサー」を設置し、水量・水温・映像データを常時監視し、建設課で一元管理しているそうです。この装置により水害の兆候検知や日常的な水質・水量管理が大幅に精度を向上したそうです。ウォーキングの最中に、いくつものセンサーを見ることができました。



④様々な歴史的建造物

「山一醤油」は、昔ながらの作りの建物が道路から奥まで100mも続く長大な敷地の中に建っていました。内部を生活・産業用水路が横切り、水と共に暮らす建築様式を今に伝えています。



旧斎藤家の「漆喰蔵」は、内部で卓球ができるほどの広さ（約 20 人収容可能）を持つ座敷蔵となっています。過去には、講習会会場として利用されたこともあるそうです。道路拡幅により以前より一部が縮小された経緯がある建物です。

「旧沼澤医院美術館」は、活用における課題がみられる事例でした。かつては、吉永小百合さんが出演の JR 東日本 CM ロケ地にもなった蔵を活用した美術館でしたが、所有者の高齢化と意向により現在は閉館され、手入れもされていないそうです。歴史的価値の高い個人所有物件の維持・活用の難しさを垣間見ました。

2 日目（6 月 22 日）：宮地区の寺社の成り立ちと旧家等施設

2 日目は長井あやめ公園の駐車場をスタートとして、宮地区の街並みや寺社などの見学を行いました。

① 總宮神社

坂上田村麻呂による創建伝説や、蒲生氏郷統治の時代に周辺 44 社の統合計画（実際に集まったのは 12 社）を行うなど、地域の歴史を象徴する神社となっています。

当神社では、県指定天然記念物に指定されている直江兼続が植えたといわれる樹齢数百年の「直江杉」がランドマークとして機能しています。かつては、何も無い平野で川を行き交う際の目印となっていたそうです。

現在は、地域に伝わる「黒獅子舞」発祥の地であることに加え、バイクで鳥居をくぐる「バイクの茅の輪くぐり」を設置し、「ライダーの聖地」として新たな観光客層を開拓しています。



② 商業建築の保存と活用

旧呉服商の「丸大扇屋」は、明治 11 年に建てられた商家建築の建物です。当時は商品を背負って売り歩く行商人の宿泊拠点でもあったそうです。現在はイベントスペースとして活用されており、この日は長井あやめ祭りに関連し、生け花の展示が行われていました。この建物では、大正時代に作られた貴重な歪みのあるガラスが保存されている点が、文化財としての価値が高いとの説明がありました。

「長沼酒造」は、敷地内にある 6 つの蔵全てが国登録有形文化財に指定されています。歴史的建造物を維持しながら事業を継続している貴重な建物です。

市内には、現在も開店している金物屋を始めとして国登録有形文化財が点在していて、街全体が歴史博物館のような価値を有していることが印象的でした。



③ 野川と水路ネットワーク

市の主要水源である野川は、かつては渡し船が行き交う交通の要衝で、周辺に茶屋や料理屋が立ち並ぶ商業の中心地を形成していました。現在も市中にその水が引き込まれ、景観の基盤となっています。

昭和30年代、東京オリンピックに向けたインフラ整備に使用する砂利採取により、野川の川底が約10m低下したそうです。これにより市内の湧水が枯渇する問題が発生しました。この問題を解決するため、長井小学校周辺では二重構造の水路が整備されました。地下に生活排水路、地上にはポンプアップした湧水等を流す景観用の「せせらぎ」を設ける画期的な構造となっていました。これにより都市の衛生問題を解決しつつ、子どもたちの学び舎の周りに清らかな水の流れを復活させました。この事業は国の建設大臣賞を受賞しており、都市インフラ再生の優れたモデルケースであるといえます。



④旧長井小学校施設の活用

旧長井小学校の校舎が地域交流拠点として活用されていました。

建物は昭和8年建築で、全長が113mの木造校舎であり国登録有形文化財に指定されています。

この建物を30年前に150cmほどジャッキアップし、基礎から全面的に耐震改修工事を実施して再生させました。この時の事業費は約8億円だそうです。

現在は資料館、市民ギャラリーやイベントスペース、喫茶室として活用され、歴史的建造物を保存しつつ地域コミュニティの核として機能していました。

⑤駅舎と市役所の複合化

長井駅の駅舎と市役所庁舎を一体的に整備した建物も印象的でした。行政機能を集約し、市民の利便性向上とコンパクトな都市構造を実現していると感じました。

建物のデザインは、かつてこの地にあったグンゼ製絲の「繰糸（そうし）」をイメージした「Y」の字形を採用し、地域の産業史への敬意を示しているそうです。

2日間のフットパスコースを視察見学して酒蔵や商家など複数の国登録有形文化財が街中に点在し、その施設を紹介する案内人の活躍や、黒獅子舞のような無形文化財を観光資源として活用するとともに、総宮神社のように「ライダーの聖地」といった新たな取り組みも実施している点は、様々な視点から地域活性化に貢献しているものと感じました。

一方で、施設所有者の高齢化などによる施設の維持管理の難しさや、市内に点在する歴史的価値や先人が工夫しながら整備してきたインフラ（例：せせらぎ水路の記念碑）が、説明を受けなければ市民にもほとんど知られていない点があるなど。街が持つ資産価値を最大限活用する難しさも考えさせられました。

案内役のお二人からとても熱心に説明いただき、お話の内容も非常に興味深く、楽しく学ぶことができました。暑い中ではありましたが非常に中身の濃い2日間でした。

2.2. ウォーキングイベントの実施

2.2.1. 亀田ウォーキング（江南区）

(1)開催日時：

令和7年10月5日（日）午前9時半～11時

(2)開催場所：亀田地区コミュニティーセンター周辺

- 講師・ガイド：タウンウォークかめだ
- 参加者：23名

(3)まち歩きスポット

- 諏訪神社→稲葉神社→片桐菓子店→亀田寺
(キデンジ) →若松踏切→タカハン靴店→円満寺



まち歩きの様子

新潟市江南区の亀田地区を歩きながら、砂丘が生み出した地形や、昔の暮らしについて地元ガイドさんのお話を聞きつつ巡りました。当日は参加者が多かったため、2つのグループに分かれての出発となりました。

ガイドさんの分かりやすい説明のおかげで、地域の歴史や風景を楽しく知ることができました。ただし見どころが多く、振り返りながら当時の様子をまとめましたが、記憶があいまいな部分をご容赦ください。



出発前ミーティング

最初に到着したのは、諏訪神社（諏訪社）です。全国の諏訪神社と同様、長野県諏訪市の諏訪神社を本社としており、歴史的にも古く、1653年に創建、現在の社殿は1831年に再建されたものです。

今回は特別に拝殿内を見学させていただきました。詳細を思い出せない部分がありますが、とても貴重な絵画が飾られていたのが印象的でした。



諏訪神社の鳥居③



諏訪神社の拝殿内②

次に住宅街の小道を歩くと、緩やかな勾配の坂道が現れました。高い場所と低い場所が交互に続き、この周辺が砂丘地形であることを実感できました。



亀田地区の砂丘で標高が高い地点④

小道を抜けて進むと、大正創業で100年以上の歴史を持つ老舗菓子店に到着しました。名物の「亀田縞サブレ」でも知られています。こ

ここでは買い物タイムとなり、女性陣は商品をいろいろ見比べ、男性陣は足を休めるひとときとなりました。



昔ながらのレトロな菓子店

かつての亀田地区は、湿地と水路が多い土地で、舟運とともに発展してきました。福島県会津地方との交流も盛んで、その名残として「若松踏切」と名付けられたといわれています。



若松踏切

市街地へ戻ると、商店街のアーケード沿いに、昔から地域に根付く「タカハシ靴店」がありました。店内には昭和時代の写真が展示されており、当時の雰囲気を感じることができました。

新潟市の歴史や、当時を生きた人々の記録に触れられたことで感動するとともに、今回のまち歩きをととても楽しく体験することができました。

後日訪れた江南区郷土資料館では、砂丘の成り立ちや古地図などを改めて学び、地元にはまだまだ知らないことが多いと実感しました。これからも、まち歩きに積極的に参加していきたいと思います。



昭和30年代の靴屋の写真

2.2.2. 佐潟ウォーキング（西区）

(1)開催日時：

令和7年10月12日（日）13時～15時

(2)開催場所：佐潟水鳥・湿地センター

講師：澤口晋一教授

参加者：25名

(3)実施状況

①主要トピック：砂丘・バリアー・湿地の形成史

- ・日本で最長とされる砂丘の概要
- ・「新砂丘三」が全長76キロで、勝山から村上まで連続する砂丘帯と説明された。話者の調査範囲では「76キロが日本で一番長い砂丘」との認識が示された。
- ・現在位置はその砂丘の「南南西の端」に相当し、広域な砂丘システムの一部として位置づけられた。

・空中写真・地図資料による地形把握



- ・1947年の米軍撮影による空中写真を加工した図を用いて現在地周辺の地形を解説。約「80年近く前」の資料に基づく比較が行われた。

- 周辺には「水取り湿気センター」があり、その左右に特徴的な地形（筋状の高まりと湿地）が確認できるとされた。

・バリアー・砂堆と湿地の配置

- 「バリアー」や高まりは、海流と波の作用により形成されたと説明。緑色が高所、茶色が高まり、間に水が入る湿地が分布する図示があった。
- 高まりと低い場所が交互に並び、筋状の地形が連続。低地部には水が溜まり湿地となる。

・形成過程と年代

- 一番内陸側（上堰瀉のあたり）の形成は「だいたい7000年ぐらい前」。その後、海面低下に伴い高まりが海側へ順次形成された。
- 「バリアー1」と「バリアー2」の間に間隙があり、そこに「佐瀉」ができたと説明。その後「バリアー2」が形成・前進し、最後に砂丘が「バリアー2」に覆われる形になった。
- 現在の坂は「4800年から何年前」に形成された高まり（バリアー）で、当時は海面がこの高さ付近に達していたと説明された。

・現地観察のポイント（坂と湧水）

- 坂は地形上の意味を持つため、歩行中に坂を意識して観察するよう指示。「坂があると、必ずそれなんか意味がある」という趣旨で高低差の意味を考えるよう促された。
- バリアー斜面に沿って「何十箇所も湧き水」があり、現在地でも弱い湧水が確認できると説明。湧水は地下水の滞留と関係するとされた。

・ウォークの進行と条件

- 説明開始から「30分」経過し、残り「2時間」と言及。これから「バリアー」に向けて横断しながら歩く計画が示された。
- 話者は「極度の筋肉痛」で歩行がゆっくりとなる見込みと述べ、参加者にはちょうど良いペースになる可能性に触れた。

②主要トピック：海成地形から風成砂丘への移行・段差と広域連続性

・海成地形と風成砂丘の成因の違い

- 海が作った地形は、波が打ち寄せて土砂を堆積させた高まりと低湿地が交互に並ぶ「うね

り」が特徴。「平均的に3000年ぐらい前」に形成。

- 風が作った砂丘は、風で運ばれた砂が堆積し、海成地形の「うねり」や段差の表情が失われる。「1000年ぐらい前」に形成されたとされ、成因が根本的に異なる。
- 現地移動で、海の世界から風の世界へ、わずかな距離で「2000年」分の時間を飛び越えるように地形成因が切り替わる地点を横断したと説明。

・高低差・段差（崖）とその広域連続性

- 現地には「1~2メートルぐらいの段差」が連なり、赤い線で示された崖ラインとして認識される。これが海成地形と新砂丘の境界。
- この崖は広域に連続し、寺尾、青山のイオン裏（「20mぐらい」の崖）、関屋、新大医学部周辺、東区のじゅんさい池周辺の坂へと続く同一システムの斜面。
- 境界は「新砂丘」と「バリア（古くは小砂丘）」の境界であり、縄文から弥生・羽曳時代への変化を感じ取る地点とされた。

・低地の形成と水の挙動

- 電信柱周辺や道路は低く、水が溜まりやすい低湿地となる傾向。盛土道路により高さが強調されている箇所もある。
- 高いところと低いところが平行に長く並ぶ地形がこの地域の大きな特徴。農地化でわかりにくくなっているが、自然の地形の痕跡は残る。

・新明社（神社）周辺の人工改変の可能性

- 新明社は周辺より「だいぶ高い」位置にあり、背後の「でかい穴」から、土を盛って高まりを造った可能性。
- 新明社建立時には背後が海だった可能性が示唆されるが、証拠は未提示。
- 地図上の示しから、周辺で土取りをして盛土した痕跡のように見えると述べられた。

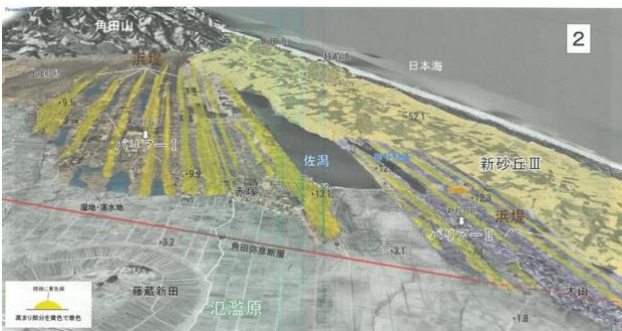
・歴史的イベントの示唆（1092年・地震・地滑り）

- 「1092年っていうのは大事」との言及があり、地滑り等の検討と結びつけて何かがあった可能性を示唆。確証は示されず仮説段階。
- 観察・移動計画と現地での体験重視

- 「感じて歩く」ことが重要で、低い箇所では意識的な観察を促した。
- 低地を横断して舗装道に出て、「見晴展望台」に登る計画が共有された。

③主要トピック：砂丘地形の改変・展望台・農業・河川土砂・海岸林

- ・砂丘地形の特徴と人為的改変
- 砂丘は本来「モコモコ」した起伏を持つが、農地化のため広範囲で削平され直線的な地形に。現在の急斜面は人工的に削り取られたもの。
- 現在位置は「下図面の52.1付近」との言及。古い空中写真に基づき、砂採取・改良工事以前の地形が示されている。
- 最も高い部分は風防目的で残された可能性。見晴らしが良いことから「見晴らし展望台」を地元と協力して整備し約10年。維持管理は大変で収容制限あり。



- ・地形の高度とランドマーク
- 新潟市あたりの最も高い地点がこの周辺にあり、高所が連なる。
- 「76キロの砂丘の中で一番高くて幅も広い」との表現で、地域内でも特徴的。
- ・河川・河口変遷と砂浜形成
- 信濃川などの運搬土砂が海へ供給され、波と風で砂浜・砂丘が形成。
- 河川改修により土砂供給が制限され、砂浜の後退が進行。古い写真から蛇行跡や流路跡が確認できる。
- 河口位置の仮説的言及や橋跡のようなものの観察。砂浜後退は「最大600m」、平均値の表現は不明瞭。

④主要トピック：パラボリック砂丘・清掃・灌漑・行程調整・コミュニケーション

- ・パラボリック砂丘の地形と形成メカニズム
- 風による砂の移動で深い谷が形成され、平面的にはU字形に見えるため「パラボリック」と呼ばれる。
- 北西の季節風が斜面を削り、削られた砂が「ヘッド」「アーム」と呼ばれる盛り上がりとして堆積。古い写真では盛り上がりが確認できたが、現在は削り取られ谷のみが残存。
- 同方向に並ぶ複数のパラボリック砂丘があり、番号「2番」が最も形態的に良好。
- ・じゅんさい池と関連地形の事例
- 東区のじゅんさい池はパラボリック砂丘の西側が風で削られ、谷底に水が溜まった例。
- 現在観察中の地点も同様の作用で形成された谷。



- ・黒松林からエノキ主体の自然林への変遷
- もともと黒松の新炭用の人工林だったが、薪需要減・管理放棄・松食い虫被害で「1980年」頃に短期間で松林が消失。
- 明るい環境を好むエノキが自然更新し、周辺樹木の約「85%」がエノキ。常緑広葉樹のタブなども見られる。
- エノキの成長は早く、直径が「1年に5cm」程度太る例。外見は「2,300年」級に見えても樹齢「50年」前後の個体がある。
- ・保存樹・保存林の指定と特筆個体
- 市に申請し、榎の保存樹指定は「令和元年」。樹高「14m」、幹周「2.4m」。
- 「気になる木」など見栄えの良いエノキが「2本」あり、新幹線からも見えるとして保存樹

に指定。保存樹マップの表紙に「2年」続けて掲載、新聞にも掲載。

- 周辺一帯を保存林として残す方針。

・地滑りが佐潟の地形に与えた影響

- 南岸は直線的だが、北岸が張り出して「上潟」と「下潟」に二分されたのは地滑りによる張り出しが原因。
- 地滑り前の佐潟は南岸同様に直線的で、黄色破線のような形だったはず。



- 「60m」程度まで砂が盛り上がると不安定になり、過去の地震が誘因の可能性はあるが確認はない。

2.3. フットパス構想の策定

今後、越後平野のありのままを歩くフットパスを展開するに当たって、対を成す湿地とともに、全体構想を検討、策定した。

テーマ：新潟市湿地都市構想 2025 ～都市と自然の共生による持続可能な未来創造～

新潟市がラムサール条約湿地都市認証を受けたことは、湿地の保全と賢明な利用に対する国際的なコミットメントを示すものであり、総合計画を頂点とする市の都市計画は、この理念と目標と多くの点で整合している。

本構想は、この国際的な主旨を都市計画の根幹に据え、“都市のあらゆる側面において湿地の価値を最大限に活かし、保全と発展を両立する持続可能な都市モデル”を追求することを提案する。

これは、従来の都市開発のあり方を見直し、自然環境と都市生活の共生といったワイズユースにより、市民が「田園の恵みを感じながら心豊かに暮らせる日本海拠点都市」という新潟市

総合計画 2030 の目標を真に実現するための羅針盤となり、これらの基本的な市の方向性の元、越後平野のありのままを構成に伝えていくことが重要である。

I. 構想の基本理念

「新潟市湿地都市構想 2025」は、ラムサール条約が掲げる「湿地の生態系を維持しつつ、そこから得られる恵みを持続的に活用する」という「賢明な利用（ワイズユース）」の原則を、都市全体の土地利用、経済活動、社会生活、景観形成などのあらゆる側面に統合することを理念として提案する。

新潟市は、国内で初めてラムサール条約湿地都市として認証された都市であり、この構想の核となるのは、ラムサール条約登録湿地である「佐潟」をはじめ、「福島潟」や「鳥屋野潟」などの里潟や、信濃川、阿賀野川といった大河、そして日本海に面した長大な海岸線といった、新潟市が誇る豊かで多様な水辺環境と、それらを取り巻く広大な水田・畑地・里山、そして都市との調和を深化させることである。

新潟市総合計画 2030 が掲げる「都市と田園の調和」というまちの特性を最大限に活かし、“市民一人ひとりが自然環境への愛着と誇りを持てるまち”を目指すことを提案する。

本構想は、持続可能な開発目標（SDGs）の達成にも貢献するものであり、特に「目標 11：住み続けられるまちづくりを」、「目標 13：気候変動に具体的な対策を」、「目標 15：陸の豊かさを守ろう」、「目標 17：パートナーシップで目標を達成しよう」といった目標と深く連携し、地域社会の持続可能性を高めていくことを提案する。

<基本理念>

新潟市が誇る豊かで多様な水辺環境と、それらを取り巻く広大な水田・畑地・里山、そして都市との調和の深化

II. 目指す都市像

本構想が目指す都市像は、「湿地生態系が豊かに息づき、その恩恵を持続的に享受しながら、市民が誇りをもって心豊かに暮らし、国内外との交流を深める、田園共生型日本海拠点都市」である。

これは、新潟市総合計画 2030 が掲げる「田園の恵みを感じながら心豊かに暮らせる日本海

拠点都市」の実現に向け、特に「湿地資源」の側面を強化するものである。新潟市の「強み」である「都市と田園の調和」を基盤とし、多様な水辺・田園環境が持つ多面的機能（国土保全、自然環境保全、良好な景観形成など）を最大限に引き出し、都市の活力と住民福祉の好循環を持続可能な形で創出することを提案する。具体的に、以下の都市像を提案する。

1. 水と緑が織りなす美しい景観

「水辺と田園が光る四季美しいまち・にいがた」を創造し、湿地や緑地、海岸線が市民の憩いの場となる、潤いと安らぎのある都市。新潟市景観計画の基本理念である「四季折々の表情にあふれる豊かな自然を大切にすること」を提案する。

2. 湿地の恵みを活かす持続可能な経済・社会

市域の約45%を占める水田の賢明な利用を通じて、環境保全型農業や各種加工品などの産業育成、フットパスや自然探訪などのエコ・ツーリズム、各地域の伝統産業の保護・育成など、新たな経済的価値と雇用を創出し、地域内経済循環の促進を提案する。

3. 生態系と共生するレジリエントな都市

自然災害の激甚化・頻発化に対応するため、湿地の遊水地機能や「ふゆみずたんぼ」などの水田の多面的機能の活用、都市緑地の防災機能強化など防災・減災対策を強化し、「災害に強い地域づくり」と生態系の健全性維持の両立を提案する。

4. 市民が主体的に関わる環境共生社会

市民一人ひとりが湿地の価値を理解し、環境学習や参加型体験活動などを通じて、湿地の保全と利用に主体的に関わる、誇りと愛着に満ちた社会を築くことが重要である。これは、新潟市総合計画2030の「パートナーシップにより目標を達成する」という視点とも合致しており、官民連携による環境共生社会の実現を提案する。

III. 構想を支える基本方針と取組施策

「新潟市湿地都市構想」は、以下の4つの基本方針と、それに伴う複数の取組施策を柱として推進するよう提案する。

<方針1> 環境保全と生態系の維持

ラムサール条約湿地都市として、「生物多様性の保全」と「湿地の健全性の維持」、加えて「ワイズユース」を最優先課題と位置づける。佐潟、福島潟、鳥屋野潟といった主要湿地だけでなく、市内全域の潟や水田環境を包括的な生態系ネットワークとして捉え、必要に応じた保全策の推進を提案する。

特に、東区、北区に広がる阿賀野川下流部や日本海に面した松林が続く海岸線「海辺の森」、秋葉区の里山、西蒲区の越後七浦海岸や角田山、多宝山、上堰潟など、各区が有する特色ある自然環境の保全と活用を強化する。これらは環境軸でもあり、新潟市みどりの基本計画に基づき、水と緑豊かなネットワークをもつ都市空間の形成と緑化の推進を提案する。

【残存する課題への対応】

- ① 外来種管理と在来種保全：佐潟など、市内の湿地に生息・生育する希少な動植物の保護を強化するとともに、生態系を脅かす外来種の駆除を継続的に実施する。
- ② 環境保全型農業の推進と両立：「儲かる農業」の実現を目指す中で、農薬や化学肥料の使用を抑制する「環境保全型農業」の普及を加速し、周辺湿地への負荷を軽減する。SDGs目標2「飢餓をゼロに」、目標12「つくる責任 つかう責任」に貢献するため、持続可能な農業生産の推進と、生産者の意識啓発を両立させる。
- ③ 水質汚染対策の強化：公共用水域への不法投棄や過失による水質汚染は、湿地生態系に直接的な悪影響を及ぼす重大な問題である。
- ④ 飛砂対策の推進：松浜海岸（北区）や西区の海岸部における飛砂被害の軽減に向け、飛砂防止柵の設置や、海浜植物の植栽など地域住民との協働活動を推進する。

<方針2> 持続可能な経済活動との調和

経済活動の推進にあたり、湿地環境への負荷を最小限に抑え、“湿地の恵みを活かした新たな経済的価値の創出”を重視する。新潟市総合計画2030の重点戦略である「地域企業の経営力強化、新たなビジネスや成長産業の創出・育成」や「豊富な田園資源を活かした儲かる農業の実現」は、環境共生型であることを前提とする。

特に、北区の新潟東港や、南区の「フルーツ王国」としての果樹生産、西区の「くろさき茶豆」や「いもジェンヌ」、秋葉区の花き・花木産業といった地域の産業特性を湿地都市の価値と結びつけ、その魅力を国内外に発信する。

【経済・産業活動の優先と環境負荷のバランスへの対応】

- ① 厳格な環境影響評価の導入：大規模な都市開発や産業施設の立地、土地利用の変更に際しては、湿地生態系への影響評価を必須とし、生態系への直接的・間接的影響（水循環、生物移動経路の分断、景観変容など）を回避・軽減するための具体策を、計画段階から組み込むものとする。
- ② エコ・ツーリズムと体験型観光の戦略的推進：佐潟や福島潟、鳥屋野潟など、湿地の魅力を中心としたフットパス（エコ・ツーリズムや農業体験）などの体験型観光を戦略的に推進し、交流人口の拡大と地域経済の活性化を両立させる。具体的には、「湿地カード」の収集イベントを継続し、佐潟水鳥・湿地センターを拠点とした解説活動など、市民や観光客が湿地の価値を体験し学べる機会を増やす。
- ③ 環境に配慮したビジネスモデルの支援：新たな産業創出や企業誘致は、脱炭素化や資源循環型社会への貢献を前提とし、環境負荷の少ない技術や製品を開発・導入する企業への支援を強化する。特に、新潟市が誇る食品関連産業の集積においては、環境に配慮した食品生産・加工、流通システムの構築を促進し、国内外へのブランド価値を高める。

＜方針3＞インフラ整備における生態系配慮
道路、橋りょう、治水施設などのインフラ整備は、新潟市総合計画 2030 の重点戦略「安心・安全で災害に強いまちづくり」と「持続可能なインフラの整備」に基づき、「防災・減災機能の強化」と「湿地生態系の保全・創出」を両立させ、持続可能なインフラ強靱化を目指すものとする。また、新潟市景観計画における「自然を活かしたうるおいのある景観の形成」、および新潟市農村環境計画が重視する農業・農村の「多面的機能」と「環境との調和」をインフラ整備の指針とする。

【インフラ整備と環境保全の具体的な統合への対応】

- ① グリーンインフラの積極的導入：大規模な河川改修や護岸整備に代わり、またはそれに加えて、湿地の自然な貯水・浄化機能を活用した「田んぼダム」の拡大利用や、河川の自然再生を目指す。
- ② 多自然型川づくり：市街地での雨水浸透マス・貯留タンクの設置など、生態系に配慮したグリーンインフラを積極的に導入する。これにより、都市の浸水対策と生物多様性の保全を両立させる。
- ③ 生態系ネットワークの確保：新潟中央環状道路などの幹線道路整備においては、野生生物の移動経路の分断を避けるための設計（エコブリッジ、トンネルなど）を義務付け、湿地や里山との生態系ネットワークの維持・強化を図るものとする。
- ④ 計画段階からの生態系専門家の参画：インフラ計画の初期段階から、環境部門と生態学の専門家が共同で評価を行い、湿地保全と機能維持のための最適なソリューションを導き出すものとする。新潟市住生活基本計画が示す「安心・安全・快適で地域の特性を活かした住環境の形成」にも貢献するため、湿地周辺の住環境整備においても自然との調和を重視する。
- ⑤ 遊水地機能の維持・強化：鳥屋野潟や福島潟放水路など、既存の湿地や河川が持つ遊水地としての治水機能を維持・強化し、豪雨災害や水害から市民の生命と財産を守るものとする。これは、新潟市農村環境計画の理念にも合致するものである。

＜方針4＞市民参加と環境教育の推進

ラムサール条約が重視する「交流・学習（CEPA）」の柱に基づき、「市民一人ひとりが湿地環境の価値を理解し、その保全と賢明な利用に主体的に関わる社会」を築くものとする。次世代への環境遺産の継承のため、継続的な環境教育と啓発活動を重視し、新潟市総合計画 2030 の「パートナーシップにより目標を達成する」という視点や、各区の区ビジョンにおける「協働によるまちづくり」の推進と連携する。

【意識と行動のギャップ解消】

- ① 体系的な環境教育プログラムの実施：市民の湿地に対する意識と行動のギャップを解

消するため、小中学校での「アグリ・スタディ・プログラム」のような湿地に関する体験型環境教育を充実させ、子どもから大人まで、楽しみながら学べる機会を増やすものとする。佐潟水鳥・湿地センターや福島潟などの湿地施設を拠点とした自然観察会や学習会を強化し、市民が湿地の重要性を五感で感じられるプログラムを提供する。また、フットパス・コースマップなどを教材として活用し、楽しみながら湿地への関心を高める機会を提供する。

- ② 多様な主体との連携強化と市民参加の促進：地域コミュニティ協議会、自治会・町内会、NPO、大学、企業とのパートナーシップを深化させ、湿地保全・利活用活動への市民参加を促進する。西区での海岸清掃活動や、佐潟ボランティア解説員の活用を全市的に展開し、市民一人ひとりが「自分ごと」として湿地に関わる機会を創出する。北区においても、自然保護活動を行う団体の支援や育成、地域の保全活動継続のための体制づくりを推進する。
- ③ 情報発信の強化と意識啓発：市民への湿地の価値と保全の重要性に関する情報発信を強化する。ウェブサイト、SNS、広報誌、地域イベントなどを活用し、湿地の魅力、保全活動の現状、市民ができることなどを分かりやすく伝え、市民の環境意識向上を図るものとする。世界湿地の日（2月2日）前後のイベント実施も積極的に参加、促進する。

IV. 推進体制

本構想の実現に向けては、新潟市役所内部の連携強化に加え、市民、事業者、教育機関、地域団体といった多様な主体との「協働」を基盤とする必要がある。新潟市総合計画 2030 推進本部が中心となり、市長を本部長とする全庁体制で本構想の取り組みを強力に推進することを提案する。

V 戦略的方向性と課題

1. 「オープンにして守る」保全と活用の両立
- 湿地都市ブランドの不整合：福島潟の文化祭が「静かに鳥を迎える」趣旨から逸脱している可能性が指摘された。市の公式なイベント指針や生態系配慮の基準が未整備で、ブランドイメージの混乱を招いている。

1. 全庁的な推進体制の確立

新潟市総合計画 2030 推進本部は、各部局や区役所と連携し、湿地都市構想の目標達成に向けた施策を横断的かつ統合的に推進している。定期的な本部会議を通じて進捗状況を共有し、課題解決を図ることが求められる。

各区の区ビジョンは、それぞれの地域特性を活かした湿地保全・利活用策を策定し、全市的な構想と整合させながら地域レベルでの実践を進めるものとする。

2. 多様な主体とのパートナーシップ

新潟市総合計画 2030 の推進視点である「パートナーシップにより目標を達成する」に基づき、地域コミュニティ協議会、自治会・町内会、NPO、大学、企業、専門家など、多岐にわたる主体との連携を強化する。

湿地の保全や利用に関する委員会などの組織の活動を支援し、市民や専門家の意見が計画・管理に反映される仕組みを提案する。特に、区自治協議会は、地域住民の声を市政に反映させる「協働の要」として、湿地都市構想の地域での具体化の推進を提案する。

3. 計画の進行管理と情報公開

本構想は、新潟市総合計画 2030 と同様に、定期的な進捗評価と社会情勢の変化に応じた柔軟な計画の見直しを行う PDCA サイクルを確立し実施することを求める。

成果指標を中心とした進捗管理を行い、透明性の高い情報公開を通じて、市民との合意形成を図りながら推進していくことを提案する。特に、外部有識者会議を設置し、産業界、関係行政機関、教育機関などの有識者から計画推進に関する意見を継続的に得る体制の構築を提案する。また、市民アンケートやワークショップ、パブリックコメントなどを通じて、市民の意見を計画に反映させる機会を継続的に設けるよう提案する。

- 生態系への配慮不足：白鳥の回復期（10～12月）と大規模イベントが干渉するリスクがありながら、回避・緩和策が具体化されていない。

2. 次世代への継承と発信

- 人材継承の危機：各団体でメンバーの高齢化が深刻化し、若手参加を促す戦略やガイドの体系的な育成制度が欠如している。
 - 発信手法の高度化：学生協働による SNS 発信（映える写真・動画）や謎解きウォークなどの取り組みは始まっているが、組織として若者を惹きつける価値提案（スキル獲得、インセンティブ等）の設計が追いついていない。
3. 広域連携による魅力の最大化
- フットパス計画の停滞：新潟砂丘フットパスの具体ルート、地権者調整、安全管理、資金モデルが未定で、計画が停滞するリスクがある。
 - 組織間の連携不足：複数の公募イベントが同時並行で進む一方、組織間の役割分担や資源配分が不明確で、リソースの逼迫や品質低下が懸念される。
4. シンボルの創出と拠点化
- シンボル設置計画の具体性欠如：砂丘最高地点へのシンボル設置が提案されたが、実現に向けた許認可、費用、時期などの計画は未定である。

3. 県立鳥屋野潟公園をフィールドとした環境学習

3.1. こども生きもの観察会

3.1.1. 昆虫観察と昆虫の工作体験

- 令和7年7月13日（日）
- 午前10時～11時30分
- 参加者：13名
- 鳥屋野潟公園県立スポーツ公園内で、子どもたちを対象に昆虫を中心とした生き物観察会を開催しました。気温は高めだったもののいろいろな昆虫や生き物を観察することができました。屋外での活動後には事前に準備していた昆虫を使ってレジン標本を作製しました。子どもたちが楽しそうに標本づくりを行っているのが印象的でした。

3.1.2. 夏休みの自由研究：潟で暮らす生き物探し

- 令和7年8月17日（日）
- 午前10時～11時30分
- 参加者：10名
- 今回は潟の生き物をテーマとしたため、水辺の動植物を中心にお話をする予定でしたが、公園内で見られる様々な生き物も織り交ぜながらの観察会となりました。ビジターハウスから清五郎の一本松までゆっくり散策しながら、いろいろな生き物の説明を行いました。ビジターハウスに戻ってきてからまとめのお話を行い、最後に新潟市から提供いただいた缶バッチと、公園事務所から提供いただいた鳥屋野潟湿地カードを子どもたちにプレゼントして終了となりました。

3.1.3. 潟のお魚観察会

- 令和7年9月28日（日）
- 午前10時～11時30分
- 参加者：14名
- 今回はマリンピア日本海から渡邊さん、清水さんが講師としてお越しいただき、魚のトラップ回収と魚の観察を行いました。トラップは事前に設置いただき、観察会前にも網で採集していただいた種類も含めて参加者の皆様とゆっくり観察しました。後半はビジターハウスを活用した観察会となりました。会の終わりには、マリンピア日本海から、子どもたちに缶バッチをプレゼントいただきました。



3.2. 探鳥会

3.2.1. 世界渡り鳥の日記念探鳥会

- 令和7年5月10日（日）
- 午前7時～9時20分
- 参加者：14名
- 鳥屋野潟公園県立スポーツ公園を散策しながら野鳥を観察する観察会を開催しました。開催の中盤まで天候が悪く、鳴き声などはあまり聴くことができませんでしたが、留鳥や夏鳥を中心に様々な鳥類を観察することができました。

3.2.2. 世界渡り鳥の日記念探鳥会

- 令和7年10月11日（土）
- 午前7時30分～9時30分
- 参加者：10名
- 今回は秋の渡りの季節にあわせた探鳥会を行いました。当日早朝に雨が降った影響か、小鳥などはなかなか見ることができませんでした。水辺の鳥たちを中心にいろいろな種類を観察することができました。また、園内を散策中にはハクチョウが何回か上空を通過し鳥屋野潟でも3羽のコハクチョウを観察することができました。

3.2.3. 新潟市の鳥「ハクチョウ」探鳥会

- 令和7年11月16日（日）
- 午前7時30分～9時30分
- 参加者：11名
- 今回は鳥屋野潟でも多数越冬するハクチョウをテーマとした探鳥会を行いました。当日は気温が低かったものの天候がよく、観察日和となりました。まずは鳥屋野潟を広く見渡せる清五郎の一本松脇からハクチョウを観察しました。風もあまりなかったためか、ハクチョウは湖面に広がり多数観察することができ

たため満足度は高かったと思います。その後は水鳥を中心にいろいろ野鳥を観察することができました。初心者向けの内容としてお話をしましたが、楽しんでいただけたかと思います。



3.3. 公園のお散歩会

3.3.1. 潟の歴史と成り立ちに触れる

- 令和7年4月20日（日）
- 午前7時～9時
- 参加者：17名
- 鳥屋野潟は人とつながりが深い場所であり、今回は歴史と文化をテーマにお散歩会を実施しました。公園内にあるオブジェや近隣の清五郎集落などを巡りながら、鳥屋野潟の成り立ちや潟端の人々の暮らしについて探りました。

3.3.2. 春の小さな生き物探し

- 令和7年5月4日（日）
- 午前7時～9時15分
- 参加者：14名
- 鳥屋野潟公園内で見られる春の生きものの観察会を開催しました。散策しながら新緑の季節に見られる生きものや植物、地面に落ちていたドングリや松ぼっくりなども一緒に確認しました。

3.3.3. 植物を使って遊ぶ・かじる

- 令和7年6月7日（土）
- 午前7時～9時30分
- 参加者：9名
- 普段何気なく見ている公園の植物たちを食べられるかどうかという視点で紹介しながら、身近な植物に触れるお散歩会を開催しました。久原さんの丁寧な解説を通して、食べら

れる種類が多くあることに気づき、参加者からの質問などにも回答いただきながら盛り上がりました。ビジターハウスに戻ってからはマコモの葉を使った草バッタの工作をしましたが、葉が思ったよりも柔らかく、難易度が高かったようです。

3.3.4. 昆虫を探そう

- 令和7年7月21日（月・祝）
- 午前7時30分～9時30分
- 参加者：23名
- 夏の昆虫観察として、昆虫類を中心に公園内で観察できた生き物をいろいろ解説いただきながら実施しました。テーマが昆虫であったため、トラップなども事前に設置しながら効率よく生き物を紹介しました。

3.3.5. セミの声を聞いてみよう！

- 令和7年8月3日（日）
- 午前7時30分～9時20分
- 参加者：12名
- この時期ならではの生き物を感じてもらおうと。今回はセミをテーマとしたお散歩会を開催しました。開始前からにぎやかなセミの音が聞こえ、セミのぬけがらも探しながら公園内にいるその他の生き物も紹介しゆっくり散策して楽しみました。

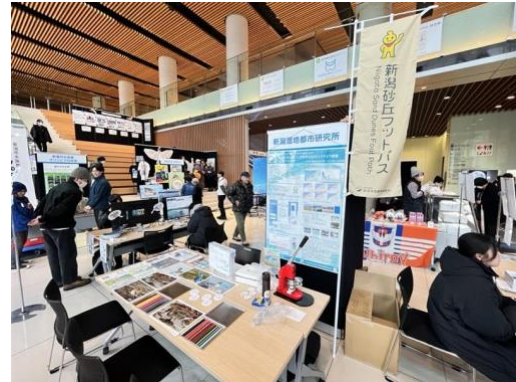
3.3.6. 水生植物の観察

- 令和7年9月6日（土）
- 午前7時30分～9時40分
- 参加者：11名
- 今回は水生植物がテーマであり、ビジターハウスの前に広がる池には様々な種類の植物が確認できるため、ゆっくりしたペースでの観察会となりました。また公園内を散策しながら、水生植物だけではなく植物全般や、植物とつながりのある生き物についても広く解説いただきました。

3.3.7. 鳥屋野潟の水の流れを探る

- 令和7年10月5日（日）
- 午前7時30分～9時35分
- 参加者：5名
- 今回は鳥屋野潟をテーマとしてとりあげ、ビジターハウス脇のふみ車のオブジェなども説

明しながら渦端をゆっくり歩く散策としました。人数も少なかったため、質問などに答えながら、渦に関するいろいろなお話をしました。清五郎の一本松では、渦を眺めながら水の流れを確認することができました。心配であった天候も影響がなく、雨に降られず開催することができました。



のぼり



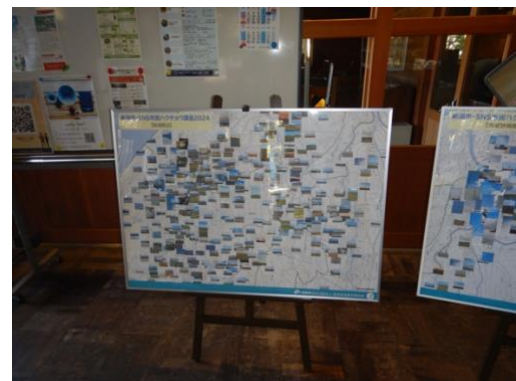
(制作物の使用状況)



のぼり



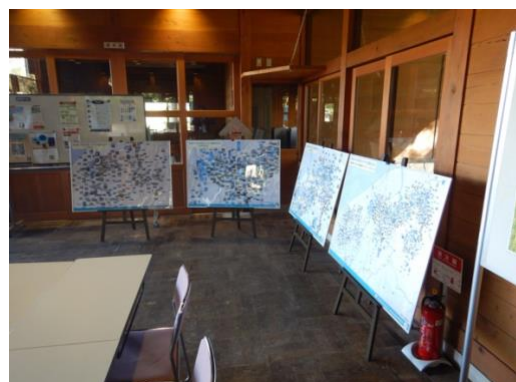
のぼり



パネル・イーゼル



ハンドマイク



パネル・イーゼル

周年記念シンポジウム「新潟砂丘フットパスの魅力と可能性を亀田から語る」

(1)開催概要

日時：令和7年10月5日(日) 13:30～16:00

場所：亀田地区コミュニティセンター
多目的ホール

主催：NPO 法人新潟湿地都市研究所

共催：新潟砂丘遊々会

協力：タウンウォークかめだ

後援：新潟市

YouTube での配信

<https://www.youtube.com/watch?v=K7F9cYOg-VU&t=5s>

(2)実施概要

本シンポジウムは、NPO 法人新潟湿地都市研究所の設立1周年を記念して開催した。ラムサール条約湿地都市として、湿地の価値をまちづくり活かすという研究所の活動方針を報告するとともに、その核となる事業「新潟砂丘フットパス」の構想を深めることを目的としている。

亀田、浦佐、佐潟・赤塚といった地域で先進的な取り組みを行う団体や、日本フットパス協会、NPO 法人まちづくり学校といった専門組織が一堂に会し、各活動の成果と課題を共有した。

議論を通じて、「小さな観光」モデルの構築、保全と活用の両立、次世代への継承、そして広域連携の重要性といった戦略的なテーマが浮き彫りになった。同時に、市のブランド戦略の不整合、生態系への配慮不足、人材育成の遅れといった深刻なリスクも明らかになり、今後

4. 湿地都市シンポジウム

の具体的なアクションプラン策定の必要性が示された。

第1部：研究所のビジョンと各地域の取り組み

2.1.新潟湿地都市研究所の活動と展望

若尾明弘理事長より、研究所の活動が報告された。研究所は、新潟市がラムサール条約湿地都市認証を受けたことを背景に、湿地の課題を市民全体や都市経営の視点へと拡張することを目的に設立された。活動理念として「湿地でまちを育てる」「価値を高め伝える」「つながり広がる社会を構築」「自立運営」の4方針を掲げている。白鳥のGPS追跡調査では、福島潟が渡り鳥にとって安心できる「ねぐら」と近接する「餌場」のセットとして極めて重要であることが可視化された。この結果は、生態系に配慮した土地利用やイベント計画の必要性を示唆している。



2.2.各地域の事例紹介

亀田砂丘の取り組み

- タウンウォークかめだ（亀田地区）：栗ノ木川の舟運や繊維産業「亀田縞」で栄えた歴史を背景に、2015年からまち歩きガイド活動を展開。学生インターンとの協働やアートイベント「カメラアート&ライト」の開催など、活動は多岐にわたる。一方で、メンバーの高

齢化（9割が60～70代）と若手ガイドの育成が喫緊の課題となっている。

浦佐フットパスの取り組み

- 浦佐地域づくり協議会（浦佐地区）：市町村合併後の人口減少という課題に対し、既存資源を活用する「風が吹けばプロジェクト」を推進。大型バス観光ではなく、少人数が半日～1日かけて地域文化に浸る「小さな観光」モデルを志向している。荒廃した旧道を整備した「三国街道コース」など5つのフットパスを核に、関係人口の創出を目指す。

新潟砂丘の取り組み

- 新潟砂丘遊々会（佐潟・赤塚地区）：全長76kmに及ぶ新潟砂丘の特性を活かし、地形の成り立ちを解説するユニークなフットパスを2016年以降16回実施。周辺はスイカ（県内産7割）や大根の一大産地であり、近年ではワイナリーが集積し、新たな魅力となっている。しかし、ガイドが特定の人物に依存しており、後継者育成が課題である。

第2部：パネルディスカッションと戦略的課題の抽出

3.1. フットパスの理念と国内の動向

日本フットパス協会の神谷由紀子氏より、日本のフットパスは英国の癒し文化とは異なり、地域の自然や景観を守る「保全」の文脈から始まったと解説された。東京都町田市の事例では、住民参加型のフットパスが小さな経済効果を生み、住民の誇りを醸成し、市外からの評価向上（スーモ「住んでみてよかった町」上位）につながった経緯が紹介された。

3.2. 浮かび上がった戦略と課題

モデレーターの小林満男氏の進行のもと、議論を通じて以下の戦略的方向性と、それに伴う未解決のリスクが明確になった。

4. アクション項目

パネルディスカッションを踏まえ、今後、NPO法人新潟湿地都市研究所が主体となって取り組むべき主要なアクション項目は以下のとおりとした。



- 新潟砂丘フットパス構想の具体化：関係団体（新潟砂丘遊々会、タウンウォークかめだ等）との連携を強化し、フルコース展開に向けた具体的なルート、運営体制、資金計画を策定する。
- 市民参加型プログラムの推進：公共施設16ヶ所を巡るクイズラリーの参加を広く呼びかけ、来年2月末までの完訪を促進する。鳥屋野潟において、「世界渡りの日」の秋季集中発信に合わせ、子どもを対象とした自然観察会等の価値普及プログラムを実施する。
- 政策提言と連携の模索：市民の意見や活動の成果を集約し、湿地都市の経営について提言する「新潟市湿地都市構想」を策定し、実現に向けた連携先を募集する。



5. 結論

本シンポジウムは、新潟砂丘フットパス構想を地域の多様な実践と結びつけ、その魅力と可能性を再確認する貴重な機会となった。同時に、市のブランド戦略、生態系保全、人材育成、広域連携といった、構想実現に向けた複合的かつ深刻な課題を浮き彫りにした。今後、特定されたリスクを管理し、具体的なアクションプランを着実に実行していく統括的なガバナンス体制の構築が急務である。

参考資料

○2024-25 シーズン：フライウェイ連携成果
(PDF) 前後編

○クイズラリーチラシ

○10/5 シンポジウムチラシ

○10/12 新潟砂丘フットパスチラシ